

(要約版)

## 近代ヨーロッパにおける嗜好飲料の文化 —挿絵と旅行記でたどるコーヒーと茶—

垣本せつ子(東洋大学国際地域学部 ドイツ文学)

### 1. 目的:

コーヒーと茶についてはそれぞれに、長い研究の蓄積があり、多くのモノグラフィーが著されている。一般に、ヨーロッパでお茶といえばイギリスの紅茶がその代表格であり、コーヒーは地中海沿海地方からヨーロッパ全体に広まった飲み物とされる。しかし、実際には 18 世紀後半になると、どちらの飲料もイギリスであるか大陸であるかを問わず、中規模以上の都市や街道筋で入手できた。それなのに、なぜお茶は専らイギリスの文化とされたのであろうか。消費量の多寡だけではなく、それぞれの飲料の位置づけもその要因ではないだろうか。本研究では、2 人のドイツ人旅行者（カール・フィリップ・モーリッツとホドヴィエツキー）を例に、近代ヨーロッパ市民のソフト飲料文化の中でコーヒーと茶の関係を考察する。

たばこやコーヒーやお茶は、よく人の顔の間近や手元にあって、その人の付属品であるかのように描かれる。18 世紀のドイツで出版された人類学図鑑や諸国風習紹介で、「異文化」とはターバンを被って水パイプを吸うナボブ（ネイボップ）や、剃髪で茶を飲む中国人だった。コーヒーや茶は、薬用の面から取り上げられるだけではなく、異国の風習や文化へのまなざしの中にあっただ。

その反面、本研究で取り上げる 2 人のドイツ人市民にとって、コーヒーも茶も、日常の朝食や団欒や社交を彩る飲み物だった。そのような習慣は通常、子どもが親を、学生が先生を、市民が貴族を、遅れている国が優位にある他国の文化をまねて形成されていくのであるが、このようにいわば無意識のうちに受け入れる習慣以外に、自分と無関係か、それどころか敵対関係にあった相手に自分との共通部分を見出し、これを取り込む形での意識的なまねもあるだろう。本研究では、18 世紀のプロイセン王国に生きた 2 人のドイツ人が飲んだお茶とコーヒーを大陸側の模範であったフランスの宮廷文化とフランス以外の文化との緊張を孕んだ出会いの中に位置づけてみたい。

### 2. 方法:

ドイツ人がイギリスを旅行先にするのは王政復古（1660）以降とされる。オランダの反英政策の影響もあり、イギリスは長い間、行きたい国にならなかった。ベルリンの美学者モーリッツのイギリス旅行記はまだ珍しかったイギリスやイギリス人についての考察でもある。モーリッツが生まれたハノーファー選帝侯国は 1714 年にイギリスを侯領として獲得した。それによって侯国の生活が変わったわけではないが、モーリッツは子どもの頃の

イギリス人旅行者との出会いがきっかけで、当時としては珍しく英語を得意とするようになり、25歳のときにイギリスに出かける。イギリスでの飲食体験は豊かなものではなく、その記載もわずかであるが、彼の生い立ちの中のコーヒーや茶に対比させながら、これを考察する。

一方、画家ホドヴィエツキーはダンチヒ、現在のポーランドのグダンスク出身で、父親はポーランド人、母方の祖母がユグノーで、妻もユグノーの子孫だった。そのため私信ではフランス語、仕事ではドイツ語を使用した。ベルリンへ移住後は当時の有名小説・時事ニュース・風刺・歴史書・学術書・モードやファッション雑誌・教育書に銅版画の挿絵を描き、その中にはコーヒーやお茶の場面も数点ある。彼の作品と日記から大陸側のドイツ（プロイセン王国）におけるコーヒー・茶の意味について考察する。

### 3. 結果：

バセドウの初等教育の教科書『初等教育書』（1769-1774）には、家庭でコーヒーとお茶を飲む習慣が取り上げられている。100%安全な水が存在しなかった当時、水とビールが子どもたちに与えられていたが、コーヒーや茶は大人の飲み物だった。コーヒーはさらに大人向けだった。1775年のベルリンの公定料金表では、コーヒーが4グロッシェン、お茶は2グロッシェンで、コーヒーは1人分につき使用するべきコーヒー豆の量も指定されている。どちらの飲み物も普及していたが、コーヒーに重きが置かれていたと見るべきだろう。

モーリッツが故郷ハノーファーで市民の恩恵者たちの助けで学校へ通っていた頃、コーヒーは上の者から施される飲み物であり、茶は乏しい小遣いで自活していたときに口にした飲み物だった。恩恵者たちの期待にも良家の子弟からなるギムナジウムの世界にも自分を合わせることができず家出したモーリッツは遍歴の徒弟たちに案内された泉の水をおいしいと感じる。しかし、当時の啓蒙主義で水の宗教性は否定されるべきものであり、キリスト教と無縁なコーヒーこそが啓蒙主義の飲み物だった。イギリスでは、大陸側の貴族や上層市民が身につけた鬘や帯剣は時代遅れとしてはやらず、城壁を壊した町々と発展した交通制度の下、人々と物資が行き交い、文字が溢れていた。そのような先進性の一方で、宗教的な事柄は大陸側では考えられないほど簡単に処理されてもいた。簡素なデザインは寂しかった。ロンドンで飲んだコーヒーは「茶色の水」だった。

ダンチヒは当時、英仏・ロシア・バルト海沿岸の国々と取引する国際都市だった。ホドヴィエツキーはここで絵画制作をめぐる社交・ビジネスの会食ではコーヒー、家族団らんではコーヒー・お茶を飲んだ。「ロシア茶」はホドヴィエツキーが挿絵を描いた当時の小説に登場する。イギリスやロシアのような「特異な」ヨーロッパは、茶に新たな文化的な意味を与えた。ヨーロッパにおける茶とコーヒーの関係は、ヨーロッパ外の「異文化」をヨーロッパの文化へ変換させる様々なステップを反映しているように思われる。